

俺はずっと一人だったが、それを気にするようなことはなかった
自分と同じ存在なのは彼女だけで、他の人間と自分が同じだとは思えなかった
いや、思いたくなかった

そんな暮らしに俺自身は満足していたが、彼女は違ったようだ
ある日、部屋に帰ると背後から視線を感じた
気配ではない
だって気配はずっとそこにあっただし、その時も変わらずそこに感じていた
俺は自然と振り返った

彼女と初めて視線が合ったことにも意外と驚きはなかった
きっといつかこうしてくれると信じてその時まで生きてきたからかも知れない